『歷代寶案』校訂本第六冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会　教育長　仲宗根　用英

沖縄県は、かつて琉球王国として、他県に例を見ない独自の歴史を歩んできました。周りを海に囲まれた琉球国は、日本本土や中国、朝鮮、東南アジア諸国からほぼ等距離の位置にあり、これらの国々との交易を通じ、政治、経済、文化等に大きな影響を受けながら独自の歴史を形成してきました。

なかでも中国（明・清）との進貢・冊封の関係は、沖縄の文化を飛躍的に発展させました。一三七二年（洪武五年）、洪武帝は琉球へ使者を派遣して、明の建国を告げ、入貢を促してきました。これに応えて琉球国中山王察度は、弟の泰期を派遣して進貢品を納めました。こうして中国との進貢貿易と正式な交渉が始まりました。以来、明治初年に至るまで、約五〇〇年間に及ぶ親密で長い交流の時代が続きました。十四世紀からおよそ二〇〇年にわたっては、琉球国は中国との進貢・冊封関係を軸に、日本、朝鮮国、シャム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々と交易を展開し、東アジアの一大貿易拠点として発展しました。

これらの国々と交わした外交文書は、原文書あるいは写しや控えのかたちで外交を専任する久米村の天妃宮に保管されてきました。しかし長い年月の間に、これらの文書も破損・散逸の恐れが生じたため、首里王府は久米村にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歷代寶案』第一集四九巻が二部作成され、首里王府と久米村にそれぞれ保管されることになりました。この第一集には一四二四年から編集時点の一六九七年までの中国、朝鮮、東南アジア諸国との外交文書が収録されています。その後、一六九七年から一八六七年までの琉球・中国間の文書は、『歷代寶案』第二集二〇〇巻・第三集一三巻として編集され、ほかに別集八冊（うち第二集目録四冊）が編集されました。

首里王府に保管された『歷代寶案』は廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたといわれていますが、その所在は依然として不明です。一方、久米村に保管されたものは、一九三三年（昭和八年）に旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸しました。しかし、

幸いなことに、この久米村のものから影印本と写本が数種作成され現在も残っています。

沖縄県は、平成元年度（一九八九年）からこれらの影印本と写本を元に『歴代寶案』の編集事業に着手し、平成三年度（一九九一年）から刊行を開始しました。この編集事業は、

一、『歴代寶案』は中・近世およそ五〇〇年にわたる外交関係往復文書で、沖縄の対外通交貿易史および外交交渉史を解明するうえで第一級の同時代史料であり、またこの間における東アジア世界の動向をも知りうる貴重な史料であること。

一、膨大かつ難解な漢文史料であるが、本文を校訂し、訳注本を作成して、これを利用しやすい形に編集することによって、今後の歴史研究の進展に役立て、併せて一般への普及をはかることで、国際化時代における県勢発展の基礎史料として活用できること。

を目的としています。また沖縄県教育委員会は、平成二年度（一九九一年三月）以来、中国第一歴史檔案館との間で、琉球関係檔案史料の収集、学術交流に関する協議書を交わしており、これまでに中国第一歴史檔案館から提供された史料は『歴代寶案』の校合・校訂・参照としてのみならず、琉球・中国交渉史の研究の発展に大きく寄与しております。

本年度は沖縄県歴代宝案編集委員会・沖縄県歴代宝案編集調査委員会のご尽力により校訂本第六冊（第二集巻五〇～七四）を刊行することになりました。本書には、一七六六年（乾隆三十一年）から一七八九年（乾隆五十四年）の間の進貢、接貢、謝恩、琉球船や中国船の漂流、漂着民の送還等の中国との往復文書が収録されているほか、乾隆三十五年の福州琉球館の改修、漢方薬である大黄の購入、琉球馬にかわる駱駝と騾馬の導入を請願した文書などが含まれています。本書によって、多くの県民が琉球の歴史に対する理解を深め、また、これが研究者の間で活用されることにより、本県の歴史研究が発展することを願っております。

最後に校訂を担当された糸数兼治先生をはじめ、『歴代寶案』の影印本・写本および関連史料を所蔵する国内外の各機関に深く感謝申し上げ、刊行のことばといたします。

平成十八年（二〇〇六）九月